

続・サムライと綿

砂漠のコスモス

〈大学建設にかける〉

高橋 朋子

Tomoko Tracy Takahashi

学術研究出版

続・サムライと綿
砂漠のコスモス
〈大学建設にかける〉

高橋 朋子

Tomoko Tracy Takahashi

学術研究出版

表紙水彩画／シンジイソザキ

目次

プロローグ	7
前編のあらすじ	8
第1章 再びニューヨーク	
キャブ・ドライバーとマグ・マネー	13
良き師・良き友	19
博士号	37
キャップ&ガウン	52
我が師・我が友	63
学会活動と学界活動	69
第2章 創価大学ロス分校	
カリフォルニアの青い空	87
カラバサス	93
ローザ・パークスさんとの出会い	111

池田先生とパークスさんの出会い	117
太平洋を越えた友情	123
我が生命の永遠の庭	135
第3章 アメリカ創価大学	
大学名称問題	149
大学院設立	164
S U A 一期生	176
ドクターT	190
第一回卒業式	199
創立者と共に	210
学生募集の旅	220
第4章 二十一世紀の大学	
二つのキャンパス	239
オレンジ郡キャンパス	257
大学認定	269

波乱万丈の日々	280
二つめの博士号	293
さらば、カラバサス	299

第5章 地球市民と貢献的人生

前三後一	317
タフガイ賞	332
創価芸術センター	345
『サムライと綿』	357
三つ目の博士号	364
変毒為薬	377
新修士課程プログラム	383
別れ、そして新たな出発	396
エピソード	415
追記	417
著者略歴	420

プロローグ

この物語は、『サムライと綿・日本とアメリカ(父の思い出)』の続編です。

前編『サムライと綿』は、2010年6月に初版本として刊行されました。そして、2011年11月に英語版 *Samurai and Cotton — A Story of Two Life Journeys in Japan and America* がアメリカで出版されました。英語版は、出版の翌年(2012年) Next Generation Indie Book Awards (Winner) と International Book Awards (Finalist) の二つの文芸賞を受賞しました。また、日本語版は、初版発行からちょうど十年後の2020年6月に、電子書籍版として改訂版がブックウェイから刊行されました。

前編の主人公は、私の父(喜儀^{きよし})と私(著者・朋子^{ともこ})です。日本とアメリカが舞台です。前半は、先祖の歴史と喜儀の生い立ちから物語が展開されます。後半部では、私のアメリカ留学体験が中心を成します。最終章では、日本に一時帰国してから起こった様々な事件に始まり、その後、再びアメリカに戻ってから(1979年から2006年まで)の二十数年をカバーしました。同章は、内容をかなり端折ったのは確かです。実際のところ、前編の読者から、最終章のことをもっと詳しく知りたいとの声が寄せられました。

そこで、続編となる本書では、前編の第10章「その後」を膨らませる形で物語を展開することにしました。よって、私がニューヨークへ再び戻り、その後カリフォルニアに移転してからの話が中心となります。

〈前編のあらすじ〉

高橋家は、旧習深い田舎の町で、明治時代初期から続く寝具店を代々営んでおりました。商売のおかげで経済的には恵まれた一家でしたが、代々不幸が続いておりました。例えば、「初代」と呼ばれた創業者の喜助は長生きでしたが、二代目と三代目が早死にしました。また、四代目の喜儀（著者の父）の母・トクは、喜儀が十ヶ月の時に亡くなりました。他にも様々な不幸が襲いました。

喜儀（主人公）は、継母に育てられ、苦勞をしながらも、立派な青年に成長します。そして、二十歳の時に、徴兵され、満洲に渡り、戦争の辛酸をなめつくすことになります。無事に生還しますが、出征中に父・喜一が亡くなっており、家業も廃業に近い状態になりました。家族も崩壊状態に陥っていました。

喜儀は、戦後間もなく、東京の繊維会社に勤めながら、家業の再建を開始します。そん

な中、お見合いをし、さち子と結婚。さち子は、喜儀の継母にいじめられるなどの苦勞をしながらも、齒を食いしばって耐え抜きます。そして、1948年に長男の寛美を出産。その後、継母とその一族が家を出ていき、喜儀とさち子は、家業の本格的な再建を開始します。そして、1952年に長女の玲子が誕生。1955年に次女の朋子（著者）が生まれ、一家はやつと春を迎えます。

末っ子の朋子は、「おてんば」「お父さん子」として、すくすく成長。高校受験で志望校の受験に失敗しますが、その挫折を乗り越え、英語教育で有名な女子校に入学し、優等で卒業。しかし、大学受験で再び挫折を味わいます。そんな時ちょうど、通っていた高校の上に新設された付属短大がアメリカ留学制度を発表します。「これだ!」とばかりに、朋子は同短大に入学し、アメリカ留学を目指します。そして、見事全額奨学金を勝ち取ります。

1975年六月、朋子は一人、アメリカに飛び立ちます。二年後、留学先のアルバートス・マグナス大学を優等で卒業。直後、ニューヨークにあるコロンビア大学大学院に進学します。コロンビア大学では、あれほど学びたいと思った言語学ですが、それほど面白いとは思えず、朋子は悶々とした日々を送ります。そんな中で、創価学会員（日蓮仏法実践者）と巡り合います。それまでは、創価学会とは全く縁がなかった朋子ですが、ニューヨークの学会員達との交流を通し、自分も日蓮仏法を実践してみることにし

ます。

そんなある日、朋子は、胸騒ぎのような衝動に駆られ、1978年六月、大学院を休学し、日本に一時帰国します。そこで直面したのは、父（喜儀）の病気でした。家族はニューヨークに一人でいる朋子に心配をかけまいと、喜儀の手術のことを隠していたのでした。胃潰瘍とのことでしたが、実際には、胃癌でした。そのことを朋子が兄（寛美）から知らされてから二週間後（1979年一月）、喜儀が息を引き取ります。喜儀は亡くなる寸前に最期の力を振り絞り、朋子に「学校を中途半端にするな。アメリカに戻りなさい」と言い遺します。

喜儀の死後、家業の寝具店を母（さち子）と姉（玲子）が継ぎます。朋子は、しばらく店の手伝いをしますが、父の遺言通り、アメリカへ戻ることを決意します。コロンビア大学大学院に連絡を取ると、一年の休学期間がちょうど切れたばかりで、復学できないとのこと。しかし、幸運にも教育大学院（ティーチャーズ・カレッジ）の教授から応用言語学科を受け直すことを勧められます。大急ぎで書類を整え、合格。ビザも間に合いました。

時間すれすれ、やつとのことで準備が整い、朋子は九月の新学期を目指します。再びニューヨークです。

第1章

再びニューヨーク



挿画：高橋さち子

キャブ・ドライバーとマグ・マネー

1979年九月一日、私は再びケネディ空港に降り立ちました。一年二ヶ月ぶりのニューヨークです。懐かしいような、懐かしくないような……。

空気がどんより重く感じられたのは、気のせいでしょうか。残暑の中、排気ガスでよどんだ空気は独特の匂いとなり鼻をつきました。

「ああ、ニューヨークの匂いだ……」

イエローキャブを捕まえました。ドアに凹みがあり、あまり綺麗とは言えない、典型的なニューヨークのタクシーです。ドライバーは、飄々とした白人青年で、真つ白なワイシャツを着ています。当時は黒人やヒスパニック系の運転手が一般的だったニューヨークで、何だか「らしくない」というか、非典型的な風貌のキャブ・ドライバーです。スツーカーを渡した際、ふと目にした彼の手の透き通るような白さと細長い指が嫌に印象的でした。

スツーカーをトランクに入れてもらい、彼に告げました。

「コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの寮で、ワイティアー・ホールっていうところに行ってください。アムステルダムと120丁目です」

父の逝去から八ヶ月。大学院休学中の一年間に日本で起きたことを考えれば考えるほど、今こうしてニューヨークのハイウェイを走っていることが不思議でなりません。自分でも「よくアメリカに戻ってきたものだ」と思いつつ、タクシীর窓から、ボーと外の景色を眺めました。クイーンズの住宅街の緑が見えてきました。懐かしいような、懐かしいような……。

しばらく走ると、無口で無愛想だったドライバーが話しかけてきました。

「それで、T Cで何を勉強するの?」

T Cというのは、ティーチャーズ・カレッジ(教育大学院)の略称です。「あれ、この人、よく知っているな」と思いつつ答えました。

「応用言語学」

すると、矢継ぎ早に次の質問です。

「マスター(修士号)?」

「イエス」

と答えつつも、「余計なお世話だなあ」と少々迷惑気味の私。

すると、急に頓珍漢な質問が飛んできました。

「運転免許証は持ってるの?」

「イエス?」

と「何が言いたいんじゃない」とばかりに語尾を上げて答えると、

「それは良かった」とボソリ。

私は思わず「はあ？」とばかりに、リアビュー・ミラーに映る運転手の顔を覗き込みました。

運転手は、冷めた表情で言いました。

「僕も、マスターってやつを一つ持っているけどさ、見ての通りだ」

1970年代のアメリカは、景気不安定・低成長という経済的に混乱の時代でした。失業率が高く、高学歴者達も、見合った仕事につけず、こうやってキャブ・ドライバーをやっていたのです。当時のちょっとした社会現象でした。1980年代に入って景気が回復しますが、私が再びニューヨークに戻った頃は、まだまだ不景気の真只中でした。大変な思いをしてアメリカに戻ってきて、これから修士号を取ろうとしていた私は、すっかり出鼻を挫かれてしまいました。

マンハッタンのアップパー・ウエストサイドが、砂漠の蜃気楼のように目の前に広がりました。懐かしいような、懐かしくないような……。

ウィティアー・ホールに無事到着。入寮のためのチェックインを済ませると、係のア

レンという男がいきなり言いました。

「外に出るときは、二〇ドル札をポケットに入れて出るようにね」

キョトンとした私に、アレンは続けて言いました。

「万が一強盗に出くわしたら、命を取られる前に、すぐにお金を差し出して逃げるためだよ」

だから、このお金を「マグ・マネー」と呼ぶとのこと。つまり、「mug」[路上などで強奪]されたら、もたもたせず、すぐ差し出せるようにポケットに忍ばせておくお金」という意味です。最初は冗談だろうと思いましたが、アレンは真顔です。

日本から到着したばかりの私を見て、初めてアメリカに來たと思ったのでしょうか。アレンが付け足しました。

「旅行者みたいな格好をしたり、そういう行動を取ったりすると、やられ易いから、気をつけるように」

私は苦笑いしながら鍵を受け取り、自分の部屋に向かいました。「ニューヨークは、相変わらず物騒だな」と思いつつ、エレベーターのボタンを押しました。四階で降り、スーツケースを引きずり部屋を探しました。

たどりついた部屋は、なかなか快適そうです。難行苦行の道のりでしたが、ホッと一息です。ベッドの上に座り、しばらくボーッとしました。長旅でした。「やれやれ」です。

入寮したウィティアー・ホールでは、五部屋あるスイートの一室をあてがわれました。同じスイートの女性四人と、キッチンとバスルームを共有する形態です。リビングルームがないため、アパートとまでは行きませんが、学生にとっては上出来の環境です。

ただし、このスイートは、アムステルダム・アベニュー（通り）の真上だったため、騒音は半端ではありません。アムステルダムは、当時輸送道路でもあったらしく、夜明け前になると、大型トラックが何台も通り、それだけでも大変な騒音です。それに加え、わざとでしょうか、クラクションを鳴らしながら走ります。ブーブーなんてものではありません。グワグワと音の嵐です。早朝一番熟睡しているところを、あの騒音に襲われるのには閉口しました。

四人のスイート・メートは、親切ないい人達ばかりでした。皆それぞれ、きちっとした家庭に育ったことを感じさせる善良なアメリカ人です。ドイツ系、ユダヤ系、中国系、と多様性豊かです。経済的にはそれほど裕福ではなく、かなりの節約家ばかり……。教育者を目指すだけあって、皆ド真面目ですが、人間味のある楽しい人達でした。

キッチンで初めて顔を合わせた際、キャブ・ドライバーが修士号を持っていたという話をする、誰も驚きません。

「そうなのよ。最近、卒業前の学生に『おめでとう。運転免許証は持つてる？』って言うのが流行ってるくらいだから」

「博士号なんかを持つてるキャブ・ドライバーもいたりしてね」

このスイート・メートの一人は、私と同じ応用言語学を専攻するドイツ系アメリカ人でした。ジェーンという名のずっと年上の学生で、すでに博士課程に在籍して数年になるとのこと。終わるまでには、まだまだ時間がかかると言っていました。私は、修士課程に入ったばかり。ジェーンは、私にとって大先輩です。

「博士課程だなんて、大変そうだな。私は、修士で気が楽だ。早いとこ終わらせて、日本に帰ろう」と、自分に言い聞かせました。



ウィティア・ホールの外観 (Photo Courtesy: TC Office of Residential Services)



寮のスイートの窓から見たアムステルダム・アベニュー。道路の向こう側にあるApple Tree Marketは、注文に応じて作ってくれるデリー・サンドイッチが美味しいので有名(1979年、ニューヨーク)

良き師・良き友

すっかり出鼻を挫かれた私でしたが、TCも住めば都。ウイティアー・ホールは、教室がある他の建物に隣接しており便利で快適な住まいでした。

アムステルダム・アベニユーの向こう側には、「アップル・ツリー・マーケット」という日常雑貨も扱う食料品店がありました。この界限は大学のアパートや寮ばかりで、店らしき店といったらこのマーケット一軒のみです。あまりに便利な店でした。自炊する学生にとっては特にありがたい店でした。買い物に来るのは、ほとんどがTCの学生か教職員です。ここで教授とばったり、なんてこともよくありました。

マーケットの主人は、ラリーというユダヤ人で、体も声も大きい、とても存在感のある元気なおじさんでした。最初はちょっと怖い感じがしましたが、日常的に買い物に行くものですから、すっかり顔馴染みになってしまいました。大声で話すイディッシュなまりの英語、老眼鏡の上から人を覗き込む目つき。汚れた白衣……。いまだに親しみをもって思い出します。

私達のスイートには、ボブという黒人男性とサリーという黒人女性がお掃除をしに来てくれました。私は、この二人に不思議な親近感を覚えました。向こうも同様だったよ

うで、すっかり仲良しになってしまいました。

ボブは、黒光りする柔和な顔をしており、とても落ち着いた雰囲気の紳士でした。私に日本の家族のことをよく尋ねてくれました。二人とも背が高く、サリーは「ノッポのサリー」さながらです。ただし、スリムなノッポではなく、立派な体格というか、大変なグラマーでした。彼女と並ぶと、私などは小・中学生にしか見えません。ボブの静かな雰囲気とは対象的に、サリーは大変陽気で大胆、南部なまりの英語で政治の話をするのが好きでした。

ボブとサリーは、他のスイートや部屋にお掃除に行くものですから、見てはいけないものをつい見てしまったり、聞いてはいけない話をつい耳にしてしまったりしました。それを、折りあるごとに、ケタケタ笑いながら話すのです。

「あのハゲ頭の白人と、中国からきた可愛い留学生がいい仲だって知ってた？」

「年の差は、親子ほどだろうね」

「最初は、ハゲが英語を教えているだけだと思ってただけどさあ、あつという間にああいう仲になっちゃった」

「ハゲが迫ったんじゃないか？」

「かもね。でも、中国人の方も満更でない感じだったから、彼女の方がモーションかけたのかもね」

「へー、やるもんだねえ」

「まあ、どっちにしても、二人とも本気みたい。イチャイチャしちゃって……。信じられる？」

そして数週間後、新情報が舞い込んできました。

「構内のチャペルで結婚式を挙げるんだって！ ファンズローっていう教授が花嫁の父親役をやるんだってさ！」

「ひょっとして、彼女、グリーンカード（永住権）目当てじゃないのか?！」

「そんなことで結婚する？ 私だったら、やだね！」

こんな具合で、私は、二人から随分ゴシップを聞かされたものでした。実のところ、次はどんな話が聞けるかわくわくしていたと言った方が確かも知れません。実に楽しい日常でした。（ちなみに、この結婚式ですが、興味津々チャペルを覗きに行ったのを覚えていました。確かに、ファンズロー先生が花嫁を祭壇までエスコートする姿が遠くから見えました。）

TCでは、学生の年齢にかなりの幅がありました。大学を卒業したての若い学生もいれば、学校の管理職を目指して修士号を取得しようとする年配者がいたり、校長や教頭をやっていた人が博士号を取得するために大学院に戻って来たりといった具合でした。

また、国際色も豊かでした。世界屈指の大学院だけあって、全世界から学生が集って来ていました。そういった多様性豊かな学風には、独特の深みがありました。当然、学ぶことが日常に溢れていました。アフリカのブルンディから来た学生に公用語「キルンディ」について直接教えてもらったり、アラブ系の学生から全く知らなかった伝統や文化について教えてもらったり、新しい発見の連続でした。

勉強の面でも、楽しい日々となりました。TCの校風が自分の肌合っていたのでしよう。それを素直に受け入れることにしました。

以前学んだコロンビア大学文理学院 (Graduate School of Arts and Sciences「GSA S」) には、TCをバカにする輩がおりました。しかし、それは無知から生じた偏見でした。TCは、1887年創立のアメリカ最古の教育大学院です。かつてジョン・デューイやマーガレット・ミードといった世界的に有名な学者が教鞭を執りました。まさに、世界屈指の有名大学院です。ただし、それを私が知ったのは、TCに入学してからのことでした。

私自身も、文理学院 (GSA S) の言語学科に在籍していた頃は、言語学科の方が応用言語学科より程度が高いと錯覚していたところがありました。しかし、それは単なる偏見だと気づきました。一般に、「理論」の方が「応用」より高度だと思われるよ

うですが、応用するためには理論をマスターしていなければなりません。また、応用しなければ理論は無意味です。TCで学び始めて、応用の方が、実用性を好む自分に合っていると感じると同時に、「応用のどこが悪いのよ？」と聞き直るようになりました。（ちなみに、私がTCに入学してから数年後、コロンビア大学文理学大学院の言語学科は廃止となりました。）

この二つの大学院には、大きな違いがありました。例えば、GSAの言語学科の教授は、全員が男性だったのとは対照的に、TCの応用言語学科の教授は、男女が半々くらいで、女性の活躍が目立ちました。これは、TC全体に言えることでした。マイノリティーの教員も多かったように記憶しています。

また、GSAには、かなり時代遅れな風習が残っていました。例えば、私が在籍していた頃（1977～78年）、GSAの大学院生達のために「ティー・タイム」というのが定期的に開かれていました。これは、「フィロソフィー（哲学）ホール」と呼ばれる由緒ある建物内のパーラーでお茶やクッキーをご馳走になれる集まりでした。私は、初めてその「お茶会」に行って驚きました。そのお給仕を誰がしてくれたかと言うと、なんと！教授の夫人達だったのです。しかも、クッキーは、彼女達が自宅で焼いたものでした。茶器やカップなども自宅から持参したものでしょう。かなり高級感のあるものでした。ハウスワイフ（専業主婦）の彼女達にとっては、一大イベントだったよう

です。私がそれまでに交流したのは働く女性ばかりだったため、綺麗な洋服を着た年配の女性達が、私達大学院生に恭しくお茶を入れてくれるのには、驚いたというより、違和感を抱かざるをえませんでした。会話をしたくても、共通の話題が見つかりません。大学院生を相手に、彼女達は黙々とお茶を注ぎ、クッキーを勧めるのみでした。

T Cで学び始めると、G S A Sの言語学科にいた時と異なり、応用言語学の授業は、どの科目も実に面白く、すっかりのめり込んでしまいました。応用言語学とは、文字通り、言語学を何かに応用するわけですが、私の場合、言語教育に応用するのが一番の目的となりました。自分自身が英語を外国語／第二言語として学んだため、言語習得理論などは、特に面白く、夢中で勉強しました。

理論的な言語学は、重箱の隅をつつくような無味乾燥の議論が多かったのとは対照的に、応用言語学には、人間が研究の対象として登場します。その人間がどのように言語に関わるのか、社会がどのように言語に影響を与えるのか、言語習得に於いてどんな要因が影響するのか、といった問いに、私は最大限興味を抱きました。

休学して模索した甲斐がありました。と言うよりは、父の死が、応用言語学への転向という大きな幸運を私にもたらしてくれたのでした。「学校を中途半端にするな。アメリカに戻りなさい」との遺言のおかげです。決死の覚悟で再びニューヨークに戻れた結果

です。父への感謝は、時と共に膨らみました(『サムライと綿』第9章「学校を中途半端にするな」参照)。

応用言語学科には、ロバート・アレンという有名な教授がいました。一学期目に取った授業の一つに、アレン先生の「セクター・アナリシス(分析)」がありました。これは、英文を「玉ねぎの皮を一枚一枚剥がすように」分析する方法で、言語学を言語教育にうまく応用した善例とも言えるべきものでした。

アレン先生は、毎回情熱的に講義をしてくれました。赤ちゃんのような白い丸顔を紅潮させ、黒板がチョークの文字で埋まるまで分析の説明を続けるのです。

かなり御高齢と思っていました。後々調べたら、アレン先生は当時六十三歳だったことがわかりました。(つまり、今これを書いている私より若かったということになります。)思えば、あの時は自分自身が二十代ですので、先生がかなりのおじいちゃんに思えたのは当然のこと。また、一般的に、教壇に立つ人は、実際の年齢よりずっと上に見られてしまうのかも知れません。小学校の頃、先生達は二十代だったり、三十代だったり、今思えばかなり若かったわけですが、子供の私達には、物凄い大人とか年寄りに思えたものです。あの延長線で考えると納得できます。

時々、アレン先生は、助手をやっていた博士課程の学生(アイナ)に説明させることが

ありました。この助手のお姉さんは、アレン先生以上に頻繁に「玉ねぎの皮を剥がすように」という表現を使ったため、彼女のイメージと玉ねぎがすっかり重なり合ってしまった。それから何十年を経た今でも、玉ねぎを使って料理をしていると、セクター・アナリスの授業をふと思い出してしまいうくらいです。

一度、アレン先生が授業に現れないことがありました。先生は結構お年だった（と思っていた）ため、皆、心配しました。

当時は、電子メールがありません。何かあれば、先生（か家族）が秘書に電話をし、それを秘書が学生に伝えに来るといった具合ですが、何の連絡もありません。

「先生、病気にでもなったのかな？」

「急に死んじゃったりしたら困るよね」

「それは困る。この単位が取れないと、卒業できない」

「高い授業料を払ってるんだから、休んでほしくないよね」

などと、皆勝手なことを言っています。

「一回の授業が五〇ドルくらいになる」（今と比べると激安！）と計算している学生もいます。大学院生は、働いて学費を稼いでいる者が多く、一回一回の授業に対する価値観が学部生とは異なりました。確かに、単位といい、学費といい、学生にとっては深刻な問

題です。

その日に限って、助手のアイナも不在です。結局、私が先生の研究室を覗きに行くことになりました。

オフィスのドアを叩くと、

「イエス、カムイン（入りなさい）」

との返事が返って来ました。間違いなくアレン先生の声です。

先生は授業があるのをすっかり忘れてしまっていたのです。何かに熱中していたのか、単に物忘れが激しくなってしまったのか、真相はわかりません。教室で皆待っていることを告げると、

「そうか、すぐに行く」

驚いたり焦ったりした様子もありません。

しばらくすると、アレン先生が悠然と教室に入って来ました。そして、いつものように白い丸顔を紅潮させながら、何事もなかったかのごとく授業を始めたのでした。

私達は、少々唖然とはしたものの、一安心。しかし、それも束の間。私達は「あれ？」と顔を見合わせました。その授業の内容が、前回の授業と全く同じだったのです。一言一句違わずにです。バツが悪いというのは正にこういうのを言うのでしょうか。「先生、それは先週やりました」と誰かが言ってくれるのではないかと、皆ジリジリしながら待ちま

した。

私達の中に不都合な沈黙があったにも関わらず、アレン先生は全くお構いなし。そんなことに気付いてさえない様子です。気持ちよさそうに、授業を続けています。完全にタイミングを逸してしまった私達は、「良い復習だ」とばかりに、諦めました。二度目の授業ですので、先生の質問に誰もが淀みなく完璧に答えることができました。アレン先生は上機嫌でした。

まあ、たまにあんなこともありましたが、その真剣さのせいでしょうか、本当に憎めない先生でした。今でも、あの丸顔を、愛着を持って思い出します。ただし、今の時代だったら、授業を忘れそうになって遅れたことを、教授が学生に謝るのが普通です。同じ授業をやってしまったりしたら、下手をすると、「シラバスを無視した」などと教員評価に厳しい点がつけられたかも知れません。その前に、今の学生だったら、間髪を入れず、「それ、先週やりました」と、呆れ顔で指摘することでしょう。しかし、当時は、「教師が上、学生が下」の時代だったのです（今は逆！）。教え方も、講義が中心でした。つまり、今のように学生中心ではなく、教師中心の授業だったのです。特に年配の教授達は、偉そうで近寄りがたいものがありました。それが普通でした。当時を振り返ると、自分がいかに古い時代に生きていたものかと、改めて驚かされます。